OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人間の経験の生起と持続 : ベルクソン哲学における『物質と記憶』の位置付け
Author(s)	東, 昌紀
Citation	メタフュシカ. 2000, 31, p. 43-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66631
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人間の経験の生起と持続

――ベルクソン哲学における『物質と記憶』の位置付け――

東　昌紀

人間の経験（expérience humaine）とは何であるのか。『物質と記憶』においては、その副題からも明らかなように、ベルクソンは人間の経験を心身結合に認め、その解明がそのまま精神と身体との関係の解明であると理解する。ベルクソンは、一方で「純粋知覚 perception pure」の理論を他方で「純粋記憶 mémoire pure」の理論を提示した。この二つの理論は、車の両輪のごとくあい携えて、人間の経験を説明する。

ベルクソンは心身平行論を目論んだのか。確かにベルクソンは物質の実在性と精神の実在性のどちらも疑わない。彼は『物質と記憶』を総括して、次のように述べた。「純粋知覚と純粋記憶を実際に順次吟味した後で、まだそれらを互いに近づけることが残っていた。純粋な想い出が既に精神であり、純粋な知覚がなお物質の何物かであるならば、私たちは純粋な知覚と純粋な想い出との合流点に身を置いて、精神と物質との相互作用に何らかの光を当てる必要があった。実のところ《純粋な》、すなわち瞬間的な知覚は一つの理想、一つの極限でしかない。どんな知覚も持続の幾分かの厚みを占め、現在において過去を引き継いでいるので、記憶の性質を帯びている。したがって私たちは具体的な知覚を純粋な想い出と純粋な知覚の綜合、すなわち精神と物質の綜合と看做すことによって、心身結合の問題を最も狭い範囲に切り詰めた」(274:373)[1]と。

これは折衷的な結論に過ぎず、この二元論は一元論へと還元されると、ベルクソンに問いただすことができるだろう。ベルクソンは答えて言う。「あなたのお尋ねは、一方に身体、他方に精神の存在を前提とした問いかけです。それはちょうどコーヒーとミルクを混ぜ合わせてカフェ・オ・レにするようなものでしょう。あなたは、空間の中で、身体と精神との結合を考えています。これは問いの立て方に問題があります。人間の経験をうまく捉えるためには『身体と精神の区別は、空間ではなく、時間との関係から明らかにしなければならない』(248:354)のです」と。

第一節　等質的な、空間と時間

ベルクソンは、空間概念に基づく説明が、主観と対象との関係、真なる時間、記憶を理解不可能にし、さらに悪いことにはそれらの誤解の原因であることを繰り返し表明する。何故か。空間は行為の便宜の為に設定されるア・ポステリオリな構成である。空間性に基づく認識は行為の領域に限らなければなるまい。

純粋知覚の理論では、知覚は物質に対する可能的行為の素描であり[2]、知覚される事物の限定は行為と関わらなくなるところで終わる[3]。ベルクソンは、知覚がどのように生じるのかではなく、どのように限定されるのかを問題とする[4]。物質はイマージュの総体として既に与えられている[5]。物質の相互作用は明確に限定されるのだが、そこに生体が現れると事態は一変する。物質の現実的作用は生体にぶつかって、通過するものもあれば、抵抗にあい反射されるものもある。生体は、知覚能力に応じて、物質界の直中で純粋な知覚を生起させる[6]。物質の作用の中で、生体の知覚能力の内にあるもの、生体の利害に関わるものは「引き算diminution[7]」され、留め置かれる。あるいはこのように留め置かれることが知覚能力でもある。全体から分離された物質の作用は分離によって知覚となる[8]のである。

知覚は物質と生体の関係として現れる。知覚は物質を取り出すことではない。ところで知覚が生体の可能的行為を素描するならば、その度合を測る尺度があるだろう。常識はそれを空間において、あるいは空間として理解する。しかし行為のために構成された空間は、行為によって説明されても、行為を説明することはできない。なるほど行為の可能性は対象までの遠近によって示されるが、「空間上の距離は時間上の脅威や期待の近しさを見積もる」(160:286)のであり、空間は時間的な隔たりを前提とする。行為の尺度は時間である。

空間的表象の固定性及び任意の分割可能性は、使いやすさから、時間の捉え難さにとって代わり、揚げ句の果て、時間が空間的表象において説明された。現在と同じ資格で過去と未来が水平線上に配置され、空間の3次元に時間の次元が加算され、4次元が構成される。時間も、自由な分割と固定が可能な瞬間の寄せ集め、等質的媒質と化したのである。

私たちは時間の空間を避けて通ることはできないだろう。等質的、空間と時間の構成が可能的行為の中心を画定するのである。「等質的空間と等質的時間は事物の属性ではなく、それを認識する私たちの能力の本質的な条件でもない。それらが抽象的形式のもとに表明するのは、私たちが実在の動く連続に対して行う固定化と分割の二重の作用であり、その結果私たちはそこに支点を確保し、作用の中心を固定し、真なる変化を導く。等質的、空間と時間は物質に対する私たちの行為の図式である」

(237:345)。

行為のために構成される、等質的、空間と時間は「生きるための関心intérêt vital」[9]に基づいている。それを行為以外のところでは用いてはならない。「存在」に関する問題において、この用心は重要となる。

第二節　意識と無意識

命題「存在するとは意識へと現れることである」が真ならば、その対偶「意識へと現れないことは存在しないことである」も真である。

論理的には正しいのだが、常識はそうとは思っていないようだ。例えばケーキを見て昨日のパイを思い出した時、想い出が、喚起されるよりも前に、脳内にあったことを信じて疑わない。常識は、ケーキとパイの意識への現れの間に、強度の差異しか認めないのである。

ベルクソンが知覚と想い出の本性の差異に注意を喚起する[10]のは、それらが単に程度上の差異に過ぎなければ、現在と過去とを分離する本質的な差異が見失われるからである。

現在と過去はどう違うのか。「私の現在は私の関心を引くもの、私にとって生き生きとしているもの、要するに私をして行為へと駆り立てるものであるのに対し、私の過去は本質的に無力である」(152:280)。真なる過去は本性上潜在的で[11]、想い出は行為と関わらない限り意識化せず、現在には結びつかない[12]。常識は過去や過去の痕跡を知覚の中に探そうとする。しかし実現された、現実的な知覚に潜在的で無力な過去を探しても無駄である。

一体、真なる過去は何処にあるのか。誰しもこう尋ねてみたくなる。しかし問いの「何処」は空間を前提とし、したがって問いの立て方が誤っていると、ベルクソンにやり返されるだろう。それでは「過去は存在するか」と尋ねてはどうか。ベルクソンは「過去は存在する」と答えるだろう。彼には「存在する」ことの説明が課せられているのである。

先の命題と対偶では、命題の真理は疑われないのに対し、対偶の真理は疑わしい。見えていようといまいと、月はある。対偶が疑わしいならば、当然命題も疑わしいはずだ。にもかかわらず、命題の真理性が疑われないのは何故だろう。

意識が実効的であるには、意識へと現れるものの存在を肯定してかからねばなるまい。私の行く手をさえぎる岩は行為の可能性である。この岩の存在を抜きにして、行為の可能性を云々できない。知覚の場面では「あることと意識的に知覚されてあることとの間の差異は、本性の差異ではなく、程度の差異に過ぎない」(35:187)のである。

あることと意識的に知覚されてあることの程度の差異が、知

らず知らず、対偶「意識へと現れないことは存在しないことである」の基準となり、常識は、知覚と同様に想い出の場合でも、意識への現れと現れないことを単なる程度の差異とみなすのである。

ところで常識の修正が直ちに命題と対偶の真理を保証することにはならない。命題「存在するとは意識へと現れることである」において、まず第一に現れることの存在が保証される必要がある。この真理性が実は現在と過去の区別に関わっている。意識において無意識的心理状態が考えられないのは「意識が心理状態の本質的特徴とみなされるからであり、したがって心理状態は意識に帰属するのをやめれば存在する（exister）のを止めるように思われる。しかし意識が現在の、現実に生きられたものの、結局は働くものの特徴に過ぎなければ、働かないものが意識に帰属することを止めても、必ずしも何らかの仕方で存在することを止めるわけではない。言い換えれば、心理の領域では意識は存在の同義語ではなく、単に現実の行為あるいは直接的有効性と同義語である」(156-7;283)。

事態はどうなるのか。命題「存在するとは意識へと現れることである」は確かに真であるが、存在は意識への現れに限定されている。この限定を取り除かねばならない。その時初めて真なる過去の存在、無意識的心理状態が検討の対象となる。「ひとたび知覚されれば過去は消え去るという理由がもはやないのは、私が知覚するのを止める時に物質的対象が存在することを止めると思う理由がないのと同じである」(157;284)。

第三節　時間の実在性

意識と無意識との関係を明確にしてゆこう。身体を中心とする空間内にある対象は、身体がそれに及ぼす行為、あるいは対象の身体に対する作用を様々な程度で表す。身体は物質との関係性を知覚にする。[13] あるいはこの関係性を身体とみなしても良いだろう。生体は物質界における行為の中心、[14] 非決定の中心[15]である。行為が及ばないところに、対象が生体の要求に応じなくなるところに、意識的知覚の限界がある。[16] 意識へと現れない「客観的実在性 réalités objectives sans rapport à la conscience」(159;285) が無意識的存在様態として認められる。

無意識的存在は空間の展開だけではなく、行為の尺度である時間にも認められる。ベルクソンの狙いはこれだ。仮に、新しい現在は古い現在を過去へと押しやり、古くなった現在は消滅するか、あるいは新しい現在に保存されると考えてみよう。後者であれば現在は古くはならなず、過去はない。前者であれば想い出の現れを説明できない。ベルクソンは、過去を「客観的実在性のない意識状態 états de conscience sans réalité objective」(159;285)、もう一つの無意識的存在様態であるとみなしたの

である。過去は次から次へと蓄えられる。意識に現れないだけで、存在しなくなったのではない。

物質が等質的空間においては汲み尽くされず、時間の流れが等質的時間においては汲み尽くされないのは、無意識的存在様態が、一枚の紙の裏と表のように、それらの表象に付きまとうからである。物質には隠されたところがあり、想い出は不在であるからこそ、空間的展開、時間的展望は開かれる。無意識的存在の二つの様態は、空間の場合にも時間の場合にも、展望を開くという同じ役割を果たし[17]、想い出が現在に結びつくのは、陰の部分が対象の知覚に結びつき、それを取り囲むのと同様である。

ところで空間の無意識の秩序と時間の無意識の秩序はあまりに対照的に見えないか。前者は必然、後者は偶然である。知覚の場合には、むしろ空間的展開の方が物質界の必然性の一部であるのではないか。

そうではない。空間的展開は物質界の必然性ではない。非決定であることに自発性が認められれば、知覚の出現自体が偶然であり、その展開も方位の偶然に左右される。空間的展開は、物質界の必然性ではなく、行為の関数である。同様に時間の無意識の秩序も行為との関係に置かれる。「私たちの想い出も(知覚の対象と)同じ種類の連鎖を形成し、また決心の際にいつも現れる私たちの性格はまさに過去のすべての状態の現実的綜合である。このように凝縮すると、私たちの過去の(antérieure)心的生は自分にとっては外界以上に存在する。なぜなら私たちは、外界のほんの一部を知覚するに過ぎないのに対し、自らの生きられた経験の全体を利用するからである」(162:287)。

本当に時間的展望は行為の関数なのか。ベルクソンは過去が思い出される原則を次のように要約する。「現在の意識は絶えず有益なものを受け入れ、余計なものは一時的にはねつける。絶えず行為に向かうために、現在の意識は私たちの過去の知覚の中で、現在の知覚と統合し、共に最終的な決断に資するものしか素材に(matérialiser)できない」(162:287-288)。これこそが純粋記憶説の真骨頂である。時間における無意識の秩序の必然性は行為に有益な想い出が意識へと現れることに認められたのである。時間的展望はさらに未来へも開かれるだろう。直接的な未来は行為を引き付けている力、差し迫る行為であり、未来は行為の実践的欲求としてある。空間の無意識は期待と脅威に満ちていて、時間の無意識にはない現実味を帯びている[18]。無意識の二つの存在様態は時間的展望を通して結びつく。「私たちは、空間において気づかれない対象と時間における無意識的想い出のそれぞれに関して、存在(existence)の、根本的に異なる、二つの形式に関わるのではない。行為の要求が二つの場合逆転するのである」(162-163:288)。

私たちは、物質界の直中に身を置いたように、過去に身を置かねばならないであろう[19]。そして私たちが経験する存在(existence)は、第一に意識へと現れ、第二にそれに前後するものと論理的、因果的関係にあることを条件としている[20]。

行為の関数として時間的、空間的系列の一部が意識へと現れる。二つの系列は同じ程度に意識を満たすのではない。程度は行為にとっての有効性に比例する。行為を準備し、未来を目指すものが意識へと現れる。同じことだが意識の現れは過去と未来を無意識的存在様態にする。過去と未来を区別する境界としての純粋な現在は「生起するものce qui se fait」でしかない[21]。具体的な現在が空間の展開と時間の展望を有するのに対し、「純粋な現在は未来に食い込む過去の捕捉不可能な進行」(167:291)、生起、生成である。

具体的な現在は「過ぎたばかりの過去passé immédiat[22]」に加えて、行為にとって有益な想い出から成る。「どんな知覚も既に記憶であり、私たちは実際には過去しか知覚しない」(167:291)のだが、同時に私たちは己自身の全歴史に立脚し、己の人格を凝縮しているのである。

第四節　記憶の二形式

行為を準備するために想い出が意識へと現れる。私たちは記憶の問題に到達した。純粋記憶の理論においても、純粋知覚同様、想い出がどのように生じるかではなく、どのように制限されるのかが問題となる[23]。

ベルクソンは、過去が思い出される時、その現出の様態に従って、記憶力を二つの形式に分ける。過去は、運動機構において存続することもあれば、想い出として存続することもある。学課の記憶と朗読の想い出が記憶の二形式を説明する。次にそれを見てゆこう。

学課の記憶は課業の暗唱であり、朗読の想い出は一回一回の練習の記憶である。前者は同じ努力の繰り返しによって身につく。この記憶は課業の正確な繰り返しであり、行為として実現する。それは過去の再演であり、「私の現在の一部を成し、表象されるよりはむしろ生きられ、行為へと向けられている」(85:227)。他方、朗読の想い出は一回で記憶され、それぞれの想い出は互いに区別される。学課の記憶が動作であるのに対し、「個々の朗読の想い出は表象であり、表象に過ぎない」(85:226)。

学課の記憶と朗読の想い出の間に本性の差異が認められる。暗唱のために想い出を思い出す必要はなく、想い出を喚起するのに暗唱することもない。したがって過去の保存は互いに独立する記憶力を前提とする。「運動的、活動的記憶力 mémoire motrice ou active[24]」は同じ運動機構が行為へと向けられれば過去を再現する。「自発的記憶力 mémoire spontanée[25]」は出来事に

日付をつけ、一回でそれを記録し、思い出されれば出来事の輪郭まで描き出す。

互いに独立する記憶力は、過去を思い出す時、競合するのか。運動機構に存続する過去のおかげで、「適切な反応、環境との平衡、つまり生きることの一般的目的である適応が生じる」(89:230)。運動的記憶力は外的作用に対する直接的な自動反応として役立つ。運動機構が体制化すれば、それだけ別の行為を準備する自由の余地が増すことにもなる。

そもそも何故自発的記憶力が過去を次々に蓄積するのか。自発的記憶力のせいで、想い出が突如現れ、夢想と現実の区別が曖昧になり、行為に支障をきたさないか。現実感覚を喪失する障害がある。「もし私たちの現実の意識、現在の状況に対する私たちの神経系の正確な順応を映し出す意識が、現実の知覚と連携して、それと共に有益な全体を形成し得ない過ぎ去ったイマージュについての意識すべてを排除しなければ」(90:230)、現実感覚も失われるだろう。運動的記憶力は、行為の準備が自動的になった分だけ、行為にとって有益な想い出が意識へと現れることを許可し、無用な想い出を阻害する[26]。自発的記憶力は「保存するのに忠実であると同じほど再現するのに気まぐれである」(94-95:234)が、この記憶力も「現在の状況と類似する状況に前後して起こったことのイマージュを運動的記憶力に示し、それが成す選択に光を当てる」(*Ibid.*)。自発的な想い出の意識への現実化もやはり行為を準備し、行為の自由の度合いを高めているのである。

したがって、行為を準備し、行為へと向かうには「私たちは過去に退かねばならない」(103:241)[27]。二つの記憶力の接点は、想い出が意識へと現れ、行為へと引き継がれ、物質化するところにある。「表象になりうるすべての表象から現実の知覚に類似するものが選択されなければならず、既に始まっている或いは単に生まれかけの運動は、この選択を準備し少なくとも私たちが集めにゆくイマージュの領域を限定する」(103:241)。二つの記憶力は行為の実現に向かって互いに協力しあうのである。

第五節　生きられる反復

運動的記憶力が準備する行為は徐々に習慣となる。想い出はどうか。ベルクソンは「習慣と行為との関係が一般性と思惟との関係に等しい」(173:296)と考え、類似の知覚に基づいた一般観念の検討によって、二つの記憶力の相互浸透をさらに示している。

一般観念を説明しようとすれば、避けられないアポリアにぶつかってしまう。それは「一般化するにはまず初めに抽象しなければならず、有効な抽象を行うには既に一般化していなければならない」(174:297)という循環である[28]。ベルクソンによれ

ばこのアポリアは見せかけに過ぎず、成立しない。私たちがこのアポリアにぶつかるのは、明確に分節された知覚を出発点にするからである。

実は輪郭のはっきりした対象の知覚の方が一般化と抽象を前提とするだろう。出発点が間違っていたのである。「精神がまず初めに抽象する時に出発する類似は、精神が意識的に一般化する時に到達する類似ではない」(178:300)。私たちは既に物質界の直中に、過去に身を置いていたことを思い起こそう。私たちは「個物の知覚からでも類概念からでもなく、一つの中間的な知、際立った性質或いは類似の不明瞭な感じ」(176:298)から、あるいは「感じられ、生きられる類似、自動的に演じられる類似」(179:300)から出発する。知覚を生起させた「弁別作用 discernement[29]」、このような類似による「分解作用 dissociation[30]」が一般性を生み出すのではないだろうか。

行為の法則が一般化の過程においても指導的役割を果たす。行為を素描するには類似が大切である。差異に拘泥すれば対応に追われ、行為の実現は遅延される。類似があれば対処は一般化し、それだけ行為の可能性は高まる。一般性は運動的反応の同一性として現れると言うことができる[31]。ひとたび出来上がった運動的反応が別の作用に対しても有効となり、行為の可能性を高めるならば、何らかの共通なものが抽象されるだろう[32]。「一般観念は表象される以前に、このように感じ取られ、受容されていた」(178:300)のである。

自発的な想い出はどうか。行為を準備する時、同じ想い出が繰り返し意識へと現れると、一般化が始まる。「一般性という観念はそもそも様々の状況における態度の同一性についての私たちの意識でしかなく、それは運動の領域から思考の領域へと遡る習慣そのものであった」(179:301)。自発的記憶力は、当然、思考の領域へと遡る習慣も保存している。反省が始まるのである。私たちは運動的記憶力によって運動的反応の一般性となり、自発的記憶力によって一般観念を形成し、同時に反省を介して「類に関する一般観念 idée générale du genre[33]」を手に入れる。一般観念は行為と表象との間を絶えず行き来している[34]。生きられる類似は、反省(想い出の想い出)において観念の一般性として捉えられ、「知的に知覚され、考えられた類似」(179:300)へと帰着する。「記憶力は自発的に抽象された類似に差別を設け、悟性は類似の習慣から一般性の明晰な観念を引き出す」(179:300-301)のである。

純粋知覚の理論は、生体の利害に関わらない物質の作用の排除(élimination)が物質の表象になることを示した[35]。最低度の段階では神経系がその任に当たる。行為の実現には選択の幅があり、反応が直接的ならばそれだけ必然的な運動である。つまり行為の可能性の増大は行為を選択する際の猶予の度合いに比例する。神経系の複雑化がこれを象徴する。ベルクソンは生体

のこの非決定に自発性の萌芽を認め、可能的行為を素描する「弁別作用」に精神の前兆となる積極性を見い出している。[36]

純粋記憶の理論が精神としての自発性の発現の様態を明らかにする。意識の現れが運動的記憶力と自発的記憶力の競合に存することが、頂点を下にした円錐の比喩によって説明された。[37]ただし図解は一つの方便に過ぎず、用心してかからねばならない。

頂点を下にした円錐において、過去は底面に近づけばそれだけ古くなり、頂点の方では今に近いわけではない。確かに自発的記憶力は過去を日付とともに保存するが、順列を表すのに円錐である必要性はない。頂点を下にした円錐は上にゆくほど底面に平行に切り取られる断面は大きな円となる。この円の大きさが一般観念の形成に関わる想い出の統合の度合いを象徴する。切断面が大きければそれだけ選択の幅は拡がり、分解と弁別の程度は高くなる。反対に小さくなれば選択はそれだけ必然的になり、分解と弁別の程度も低い。つまり一般観念は円錐の頂点に近づくほど身体的反応の類似となって現実化し、非人称性を帯び、底面に近づくほど外延の大きな類となり、人格性を帯びるのである。頂点から切断面までの高さは選択、分節化に与えられる猶予を象徴する。

円錐の頂点が接する平面だけが具体的な現在ではないのは明らかだ。平面は純粋な知覚であり、頂点は運動感覚的な系としての身体である。一つ一つの切断面は様々な程度の一般観念を表す。それは記憶心像からなる意識の平面である。これらは一丸となって行為へと向かっている。円錐全体が具体的な現在であり、意識は運動的反応と想い出の反復とが織り成す分節化なのである。精神の自発性は、身体の制約を受けながらも「過ぎ去った生全体」(188:307)の反復として現れる一般観念に認められよう。物質界から純粋な知覚を弁別する作用は、一般観念を統合する反復において真に精神として現れるのである。

行為の法則でもある生きることの根本的な法則に従って、私たちは照らし出された自らの歴史の一部に身を置く。[38]記憶力は過去の反復を具体的な現在へと実現させる。ベルクソンは二つの記憶力の競合を次のように理解した。「全体的な記憶力(mémoire intégrale)は現在の状態の呼びかけに対して、同時に二つの運動によって答えている。一つは移行(translation)であり、この運動において記憶力は全体として経験の前へと向かい、したがって分裂することなく多少とも行為をめざして収縮する。もう一つは自転運動(rotation)であり、記憶力は最も有用な面を提示するために現在の状況へと向かう」(188:307-308)のである。

移行と自転が表裏を成す全体としての記憶力が様々な程度において反復を繰り返し、具体的な現在が現れる。生きることの根本的な法則は行為の法則でもあるので、私たちは運動感覚的

な系から逃れられず、思考の領域への遡行は必ず身体の領域へと戻って来ざるを得ない。また意識的知覚が既に精神の兆しでもある以上、私たちは物質の状態に留まるのでもない。円錐は、具体的な現在を実現する反復の契機の一つの図式化に過ぎない。反復は絶えず生じ、円錐は絶えず作り直されるのである。

ベルクソンによれば、自我は円錐の底面と頂点との間を動き、いずれかの切断面の位置を占める[39]。注意しよう。何か実体的な自我が想定されているのではない。自我の実体化は自我の空間的な固定であり、認められない。また円錐の底面が描かれることさえ、既に説明のための便宜に過ぎない。自我が底面と頂点の間を動くということは、自我は自発性、自由として、記憶力が成す反復と分節化の度に、生起するということである。自我が両極端の間を動くように見えたのは、反復の契機を一つの円錐に重ね合わせたからである。行為の観点から見られた場合、自我は過去の反復において生起する。さらに注意しなければならないのは、生起する以前に存在していた自我が反復とともに出現したのではないということである。むしろ反復そのものを自我とみなさなければならない。それゆえに、自我に深み、厚み、強度が認められるのである。しかし私たちが捉える自我は「表層の自我 moi superficiel[40]」でしかない。私たちは反復としての自我を生きることは出来ても、それを手に入れようとすれば、自我の空間化を避けて通るわけにはゆかないのである。

第六節　生きることへの注意

円錐の喩えは、自我のあり方を示した。移行と回転が表裏を成す記憶力は生きることに向けられている。生きることへの注意が弛緩し、行為を準備する記憶力が弱まれば、夢想や狂気が目覚めるだろう。ところでベルクソンには人を惑わせるところがある。自我はあたかも夢想の平面と動作の平面の間を行き来するかのごとく述べられた[41]。運動の平面では過去は身体的習慣として現実化し、刺激に対して直接的であり、夢想の平面では想い出が全体として展開されている。人は夢想の平面に近いところでは高い人格性を示す精神生活を送り、運動の平面の近くでは外界の作用に支配されるのである。なるほど円錐の切断面の大きさは一般観念の統合の程度を表し、それは精神性を象徴する。ただし円錐の喩えは行為へと向かう限りでの自我の精神性を示す場合にしか有効ではない。夢想の平面は、生きることへの注意、行為との関係に置かれて、初めて限定されるのである。

迂闊にも夢想の平面で、自我が、最高度の精神性を持ち、真に自由であるなどと考えてはならない。もちろんベルクソンははっきりと自覚していた。事実と言われるものは経験が実践的関心や社会生活の要求に適応した結果に過ぎず、私たちの生きられた経験、直接的直観に現れる実在ではない[42]。私たちはあの

円錐の喩えに存在論的に先立つ人間の経験をその根原にまで探しに行かねばならない。「経験が私たちの実益の方に傾き、文字どおり人間の経験となる決定的な曲がり角の向こう側で」(205:321) こそ、実在の直接的直観は実現されるのである。

ところで「決定的な曲がり角(tournant décisif)」のところで非人間的経験が人間の経験になるのではない。曲がり角はブラックボックスではない。曲がり角の向こう側もやはり人間の経験であり、曲がり角のこちら側では経験は行為にとって有益であるのに対し、向こう側では精神の功利的な作用が働かないのである。さらに曲がり角を時間の系列の中に置いてはならない。直接的経験が精神の功利性を介して実践的行為に変質するのではない。もちろん空間的表象とも無関係であり、またそれは科学が対象とする純粋認識の領域でもない。一体、どんな領域であるのか。

このような存在論的な領域が画定されれば「直観をその最初の純粋さにおいて回復し、実在との接触を取り戻し」(205:321)、私たちは持続の内に身を置くことができるだろう。したがって次の二つの持続の区別は重要である。経験の曲がり角のこちら側では「私たちがそこで自分が振る舞うのを見る持続、またそこに自分自身を見ることが役に立つ持続は、要素に分割され、要素が並置される」(207:322) のに対し、曲がり角の向こう側では「私たちがそこで振舞っている持続は私たちの諸状態が互いに溶け合っている」(*Ibid.*) のである。真に自由行為が問題になるならば、私たちは曲がり角の向こう側に身を置き、持続の直観を実現する必要があろう。

どうしたら曲がり角の向こう側に身を置くことができるか。生きることへの注意を無くせば良いのか。そうではない。生きることの根本的な法則に背いては生きてはいけない。どうすれば良いのか。ベルクソンの思考実験がヒントを与えてくれるように思われる。生活の必要から外的知覚に加えられた一切のものが取り除かれた純粋なヴィジョンを、私たちは物質から得ることができる。そのヴィジョンに私の意識と生きることへの要求を戻してみる。今度はほとんど瞬間的だが鮮やかな(pittoresque) ヴィジョンが得られる。このヴィジョンが鮮やかなのは、私たちの過去の無数の要素的な反復と変化が凝縮されているからである[43]。生きることへの注意がなければ、実は、私たちは物質のほんの僅かなヴィジョンも手に入れることができないのである。

ところで生きることへの注意も行為の便宜を図るために習慣化する。注意力を覆っている目隠しをはずし、生きることへの要求が課している窮屈さを取り除かねばならない[44]。生きることへの注意を無くすどころか、この注意力をもっと強めて、習慣化した実践的関心から解放されれば、それだけこの注意に対して「実在のもっと直接的なビジョン[45]」が鮮やかに現れるので

はなかろうか。例えば、実在に対して私たちの目を開いた何人もの画家たちが、もっと良く見ようと、繰り返し同じ絵を描いている。画家たちは手を添えて見たのである。行為が突き詰められるところで、実在の一つのヴィジョンは獲得される[46]。知覚が行為の尺度であり、行為と等価であることを考慮すれば、純粋な観想としてではなく、まさに行為の極みにおいてこそ、私たちは実在との接触を取り戻すだろう。

自発的記憶力を、ここで、再検討しなければならない。この記憶力の思い出す働きは行為に役立つ想い出を意識へと構成することである。ところで意識へと現れる想い出とは本質的に異なる想い出があることを忘れてはならない。それは、行為にとっては有益でないために無力であり、意識の敷居を越えられず、人間の経験の曲がり角のこちら側から見れば潜在的な「純粋な想い出 souvenir pur」である。行為へと引き継がれる想い出の陰に隠れているが、純粋な想い出は真なる過去として存在する。ただし意識の敷居を越えて物質化するのは行為に役立つ想い出だけであり、それ以外の過去は排除され、物質化しない。純粋な想い出は質として存在すると考える他ないだろう。曲がり角の向こう側で実在の直接的直観を実現しようとすれば、質である純粋な想い出にこそ身を置かねばならない。私たちが一挙に身を置く過去は、意識の平面として現実化する想い出ではなく、純粋な想い出だったのである。

ベルクソンは自発的記憶力の記憶する働きを特別な機能とは考えない[47]。記憶の問題はむしろ過去と現在の区別の問題とみなすことができるだろう。区別は生きることへの注意が含み得る範囲に関係する。現在はこの注意と同じだけの場を占める[48]。注意が捉えていたものが現在から廃棄されれば、それは自動的に過去となるのである[49]。

もしも、生きることへの注意が、十分に強くて、一切の実践的関心から抜け出せば、現在と過去の境界線を限りなく後ろに押しやることになり、「この注意は意識的人格の過ぎ去った歴史の全体を、瞬間的なものとしてでも同時的部分の全体としてでもなく、連続的に動いているものである連続的に現前するものとして、不可分の現在におさめるだろう[50]」。

強化された生きることへの注意が実現する不可分の現在は、可能的行為を素描する具体的現在とは決定的に異なっている。強い注意力が押し広げる不可分の現在は、質である純粋な想い出で煌めいている。行為が突き詰められたところではもはや行為の準備は問題にはならない。これが、行為の極みにおいて実在の鮮やかなビジョンが得られるのではないかという問いかけの意味である。意識を可能的行為の素描とする立場では、「過去のイマージュの総体」あるいは「私たちの流れ去った生活の絵画」(272:371)は具体的な現在の裏地であり、その現前は無力で潜在的でしかないが、注意力が増せば増すほど、それだけ

広げられた不可分の現在に純粋な想い出が現前する。この二つの現前には本性の差異がある。一方は行為の観点から見られた過去の無意識的存在様態であり、他方はもはや過去ではなく、持続する現在の様態である。(51)

ベルクソンは私たちを質である純粋な想い出の鮮やかな総体へと誘っているのではないだろうか。(52)直観によって私たちが身を置く純粋持続は形而上学がよって成り立つ存在論的な場でもある。行為の観点から形而上学的観点へと移り、そこで持続は再検討されなければならない。ベルクソンがその舞台として採り上げたのは「生（命）」の進化である。

注

（1）『物質と記憶』(*Matière et mémoire*, 3e édition, P.U.F.) からの引用、参照箇所は、括弧内の数字で表す。コロンの後の数字は全集版 (*Œuvres*, 5e édition, P.U.F.) の頁数である。他の著作に関しても、これに準ずる。

（2）*Ibid.* 16: 172. cf. 199: 316.

（3）*Ibid.* 235,260: 344,362.

（4）*Ibid.* 38: 190.

（5）*Ibid.* 17: 173.

（6）純粋な知覚は意識的知覚（perception consciente）から記憶の寄与分を捨象した知覚である。cf. *Ibid.* 31: 185.

（7）*Ibid.* 34: 187.

（8）*Ibid.* 33: 186.

（9）*Ibid.* 238: 346.

（10）*Ibid.* 79-80, 266, 268: 222, 366, 368. cf. 69-71, 151-152: 214-216, 279-280.

（11）*Ibid.* 150: 278.

（12）*Ibid.* 156: 283.

（13）*Ibid.* 35,46: 188, 196.

（14）*Ibid.* 14,20,47,62: 172,176, 197, 209.

（15）*Ibid.* 38,65-66: 190, 211-212.

（16）注2を参照。

（17）*Ibid.* 161: 287.

（18）*Ibid.* 159-160: 285-286.

（19）*Ibid.* 103,149-150,269: 241,278,369.

（20）*Ibid.* 163: 288.

（21）*Ibid.* 166: 291.

（22）*Ibid.*

（23）*Ibid.* 90,103-104, 171: 230,241,295. 注4参照。「変化の知覚」と題する講演では「過去の保存ではなく、見かけ上の、過去の、消滅を説明することが問題です」(*La pensée et le mouvant*, 3e édition, P.U.F. p.171: 1388) と述べられた。

（24）*Ibid.* 90,94: 230, 233. mémoire agissante とも表記される。

（25）*Ibid.* 89-91: 229-231. この記憶力によって思い出される想い出は「自発的な想い出souvenir spontané」あるいは「（人格的）記憶心像 image-souvenir (personnelle)」と呼ばれる。

（26）注23参照。

（27）注19参照

（28）*Ibid.* 175: 298.

（29）*Ibid.* 35: 188. cf. 44,48,74: 194,198,218.

（30）*Ibid.* 176: 299. cf. 184: 304.

（31）この同一性は生きられる類似性、生命的なものであって、幾何学的同一性とは区別されねばならない。

（32）*Ibid.* 178: 300.

（33）*Ibid.* 179: 301. ベルクソンによれば、反省の習慣には、反省という行為に有用である人為的な運動的装置、すなわち分節言語が結び付け

られるのである。反省も行為に支えられて初めて固定されるのである。したがって知覚は反省であり、個物の知覚の一般性は語の一般性と同義であると言うこともできる。言語の意味は、表象される以前に感じ取られ受容されていた感情にその源泉を持っているのである。

(34) *Ibid.* 180: 301.
(35) *Ibid.* 35: 187-188.
(36) *Ibid.*
(37) *Ibid.* 180-181: 301-302. cf. 169-170: 293.
(38) *Ibid.* 167: 291.
(39) *Ibid.* 181: 302.
(40) *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 156e édition, P.U.F. p.93: 83)
(41) *Matière et mémoire*. 192,272-273: 311,371-372. cf. 170,269: 294,368-369.
(42) *Ibid.* 203: 319.
(43) *Ibid.* 234: 343.
(44) *La pensée et le mouvant*. 154: 1374.
(45) *Ibid.* 153: 1373.「実在のもっと完全な知覚」とも言われる。
(46) このようなヴィジョンが「直観に与えられた延長」である。*Ibid.* 157: 1377.
(47) *Ibid.* 170: 1387.
(48) *Ibid.* 169: 1386.
(49) *Ibid.* 170,173: 1387,1389.
(50) *Ibid.* 169-170: 1387
(51)「雪玉転がし boule de neige」の比喩を援用することができるのかも知れない。(*L'évolution créatrice*, 6e édition, P.U.F. p.2: 496.) 純粋な想い出は、雪玉のように、具体的な現在を芯にしてどんどん膨らんでゆくのである。
(52) ベルクソン哲学研究会（第八回）において、何故無力な想い出が持続であるのか、また「鮮やかな」は物質の術語ではないかと御指摘を受けた。純粋な想い出は行為との関係に置かれた場合には無力だが、その存在様態を別の観点のもとで考察する余地は残されている。また物質の具体的な知覚には記憶力が働いており、この知覚が「鮮やか」なのは記憶のおかげである (*Matière et mémoire*. 72-73:217)。記憶の寄与分に気づかず、常識は物体自体が鮮やかだと思いこんでいる (*Ibid.* 2:162)。鮮やかさは、物質にではなく、むしろ記憶に帰属していると言ってはならないだろうか。

（ひがしまさのり　和歌山大学非常勤講師）